

# 平成24年度 【 学園研究費助成金<B> 】 研究成果報告書

学部名 国際コミュニケーション学部

フリガナ カハラ マサヒデ  
氏名 笠原 正 秀

研究期間 平成24年度

研究課題名 異文化短期滞在経験の有無により生じる異文化適応に関わる四心理要素への影響  
—異文化適応力測定テスト (ICAPS) にみられる差異の検証—

## 研究組織

	氏 名	学 部	職 位
研究代表者	笠原 正 秀	国際コミュニケーション学部	教授
研究分担者			
研究分担者			

### 1. 本研究開始の背景や目的等 (200字～300字程度で記述)

笠原 (2012) は、学部留学プログラムである中期留学 (6-7 か月間) と中期ブリッジ (2 か月間) の帰国者を対象に「異文化適応力測定テスト (ICAPS)」（マツモト, 1999）を実施した。その結果、両者に有意な差は認められなかった ( $p>.05$ )。つまり、2ヶ月と6-7か月の異文化滞在期間で獲得される異文化適応力は同程度である、という結論になった。しかし、もしそうであるとするなら、一定期間以上の異文化滞在経験のない人との間には異文化適応力の獲得に有意な差が生じるはずである、という仮説の下、調査を行った。本研究の目的は、比較的短期の異文化滞在でも異文化適応力の獲得がなされるのか、という点を検証することにある。

### 2. 研究方法等 (300字程度で記述)

本調査では、笠原 (2012) と同様、ICAPS (マツモト, 1999) を用いた。ICAPS (マツモト, 1999) は異文化適応に影響を及ぼすとされる四心理要素: 「自尊心・自己受容 (人格要素)」「曖昧さや不確実性に対する忍耐度 (感情規制要素)」「クリティカルな考え方と創造性 (クリティカル思考要素)」「開示と柔軟性 (オープンネス要素)」を測定できる質問紙である。異文化滞在経験者データは、これまで蓄積してきた学部留学プログラムから帰国した学生のものに加え、2011年度プログラムから帰国した学生たちのデータも新たに加えた。また、異文化滞在未経験者データは、国際コミュニケーション学部と人間関係学部で調査者が担当している授業を通じて収集した。データの処理は IBM SPSS Statistics Base 20 と Amos 20 を用いた。

### 3. 研究成果の概要 (600 字～800 字程度で記述)

調査協力対象者は合計 224 名であった。所属学部は国際コミュニケーション学部 149 名；人間関係学部 75 名であった。異文化滞在経験の有無の内訳は、異文化滞在経験者 151 名；異文化滞在未経験者数 73 名であった。異文化滞在経験者の滞在期間の内訳は、2 か月 66 名；6 か月 73 名；4-6 週間 10 名；親の海外赴任に伴うもので、3 年間 1 名；6 年半 1 名の計 2 名であった。

集計した結果、異文化滞在経験者の ICAPS のスコアは各項目、以下のとおりであった：自尊心・自己受容（人格要素） $M=10.32$ ,  $SD=6.892$ ；曖昧さや不確実性に対する忍耐度（感情規制要素） $M=3.13$ ,  $SD=4.691$ ；クリティカルな考え方と創造性（クリティカル思考要素） $M=4.87$ ,  $SD=5.968$ ；開示と柔軟性（オープンネス要素） $M=9.86$ ,  $SD=3.563$ ；ICAPS 総計  $M=28.19$ ,  $SD=11.243$ 。一方、異文化滞在未経験者の ICAPS の各スコアは以下のとおりであった：自尊心・自己受容（人格要素） $M=13.62$ ,  $SD=6.859$ ；曖昧さや不確実性に対する忍耐度（感情規制要素） $M=3.45$ ,  $SD=5.583$ ；クリティカルな考え方と創造性（クリティカル思考要素） $M=6.59$ ,  $SD=5.766$ ；開示と柔軟性（オープンネス要素） $M=9.82$ ,  $SD=4.250$ ；ICAPS 総計  $M=33.48$ ,  $SD=12.434$ 。

これらの結果を分散分析した結果、自尊心・自己受容（人格要素）； $F(1, 222)=11.262$ ,  $p=.001$ ,  $\eta^2=.048$ 、クリティカルな考え方と創造性（クリティカル思考要素）； $F(1, 221)=4.148$ ,  $p=.043$ ,  $\eta^2=.018$ 、ICAPS 総計； $F(1, 221)=10.144$ ,  $p=.002$ ,  $\eta^2=.044$  の各項目に 5%水準で両者の間に有意な差が認められた。つまり、異文化滞在経験のある者は自尊心や自己受容の程度が異文化滞在未経験の者よりも有意に高く、物事を批判的（クリティカル）に考え、論理的に考える傾向が異文化滞在未経験の者よりも有意に高いといえる。

※ 自尊心・自己受容（人格要素）の項目は得点が低いほど高評価となるように設計されている。

### 4. キーワード (本研究のキーワードを 1 以上 8 以内で記載)

① 異文化適応	② 異文化滞在経験	③ ICAPS	④
⑤	⑥	⑦	⑧

### 5. 研究成果及び今後の展望

(公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著者名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なものの数件を記載。)

本研究では、異文化滞在経験の有無が異文化適応力に及ぼす影響を、ICAPS を用いて検証した。その結果、自尊心・自己受容（人格要素）、クリティカルな考え方と創造性（クリティカル思考要素）、ICAPS 総計において異文化滞在経験の有無により有意な差が生じていることが確認された。特に、自尊心・自己受容（人格要素）は異文化適応において最も重要とされており、異文化適応にかかわるスキルすべての心理要素のモニターの存在とされている（マツモト，1999）。また、マツモト（1999）によれば、クリティカルな考え方と創造性（クリティカル思考要素）は行動の裏に潜んでいる原因や理由を論理的に考える能力で、物事をステレオタイプの見ることではなく、さまざまな視点から多角的に見、考えることのできる能力としている。つまり、異文化適応の過程でこうした側面が育成されることが実証されたのである。本研究の成果は、所属学会での研究発表、あるいは投稿論文という形で公開していく予定である。